

# 「無墓制」と真宗の墓制

至勢池浦

はじめに

- 一 「無墓制」について
- 二 近世真宗の墓制
- 三 「無墓制」と中世真宗門徒

おわりに

「無墓制」関係地帯の報告概要

## 論文要旨

これまで民俗学における墓制研究は、「両墓制」を中心にして進展してきた。「西墓制」は「単墓制」に対しての用語であるが、近年、これに加えて「無墓制」ということがいわれている。「無墓制」については、研究者の捉え方や概念規定が一様でなく混乱も生じていて、本稿ではこの墓制が投げかけた問題を指摘してみたい。さらに、「無墓制」が真宗門徒地帯に多くみられるところから、真宗における「墓」のあり方を通して「石塔」や「納骨」といった問題を考えようとするものである。

まず、全国各地の事例を整理してみると、これまでの報告には火葬と土葬の場合が区別されずにいたり、あるいは「墓がない」というとき「墓とは何か」が曖昧であった。それはまた、両墓制における「詣り墓」（石塔）とは何かが曖昧であったことを示している。「無墓制」の実態は、火葬したあとに遺骨を放置してしまい、石塔を建立しないものであるが、この墓制は両墓制研究の中

で、いま一度、遺体埋葬地や石塔の問題、土葬だけでなく火葬の問題を検討しなければならないことを教えている。

真宗門徒になぜ「無墓制」が多いのかについては、真宗信仰が墓をどのように考えていたのか歴史的に考察する。現在の真宗墓地にみられる石塔の形態や本山納骨の成立過程をみて、真宗の墓制観や教団による規制との関係を論じる。そこには、遺体や遺骨を祭祀することは教義的に問題があった。中世においても、真宗は卒塔婆や石塔を否定的であって、このような墓や石塔に対する軽視觀は近世を通して今日まで至り、火葬のあとに遺骨を放置したまま石塔も建立しない習俗が残存したのである。また、真宗は墓としての石塔は否定したが、納骨儀礼は認めて、近世教団体制の確立する段階で中世的納骨儀礼を近代的な形で継承したのであった。